

# 大乘の縁起

平 川

彰

釈尊は縁起を悟ったから、佛陀になられたと言われています。それ故、縁起説は佛教の根本思想であります。それだけ縁起は深淵な思想でありまして、その片鱗を知るだけでも容易ではありません。

縁起とは「縁によって起る」という意味であります。縁によって起ったものは掴めないのです。例えば私共の「こころ」は縁によって起ったものでありますが、しかし心は無常でありまして、絶えず変化しています。それ故、

つかんだ刹那に心は変化してしまいます。ですから「自分の心」といいますが、心は掴めないのです。私共が掴んでいる心は、心のありのままの姿ではなく、心が作り上げたものです。このことは、人間の生命についても言うことができます。自分のいのちほど大切なものはありません、誰でも死にたくないとはい、何とかしていのちを引きとめようと思えますが、いのちを止めることはできません。死期が来ればいかに生きたいと思っても、死はさけられない



のです。これは生命が無常であって、掴むことのできないものだからです。

このような流動的な世界の中で、多くの縁が集って新しいものが生ずることを理解するのが、縁起の立場です。このことを「衆縁所生」といひまして、どんなものでも、一つの縁だけから生ずるのではなくて、必ず多くの縁が集って生ずるのです。これと異なる見方は「因果」の立場であります。これは「因から果が生ずる」という見方です。

例えば種子から芽が生ずる場合、因果論の立場は、原因である種子を立場として、因の種子と、果の芽とを直線的につなげて理解します。しかしこの立場では、芽の生ずることについて、種子以外にも多くの原因のあることが見落される危険があります。

これにたいして「縁起」の立場は、起ったもの（ここでは芽ですが）を先ずみとめて、この芽が何を原因として生じたかを探求するのです。この場合、種子はもちろん芽の生ずる重要な縁ですが、しかし乾いた種子は芽を出さないのことで、雨が降って種子がほどよく湿ったところで発芽の活動が起ります。その意味では、雨が降ることも重要な縁です。さらに季節が春の暖かい時候になっていることも

大切です。さらに大地の力、土壤の力も大切です、芽には肥料の力もふくまれています。さらに呼吸のための酸素の力、光合成作用の炭酸ガスや太陽の光など、数えきれないほどの条件のあることが分ります。

すなわちこれらの力が集って、一つに融合して芽として現れるのです。縁の力は多数でありますから、それらの力が変化すれば、それにしたがって、果としての芽の在り方も変わっていきます。ここに、芽が芽でありつつも、絶えず形を変えていき、芽から葉が出て、茎も成長し、根は地中にのび、植物になっていくことが理解できます。このような流動的な在り方において存在を理解することが、縁起の立場です。

縁起の立場から存在を見ると、存在は縁の力によって生じたものという理解があります。例えば自分という存在を考えると、自分が絶えず多くの縁によって生かされているという理解が生じてきます。それは、吸いこむ空気を考えただけでも明らかです。自分は自分の力で生きているようですが、その「自分の力」というものも、縁の力が自己に摂取され、自己の力に転化したものであることが素直に受

け容れられます。そこに、若い時には若い自己が、老年には老年の自己が、抵抗なしに受け入れられます。

縁起の立場では、自己が衆縁所生であることは自明でありますから、自己が「無我」であることも自然に理解されます。自己が衆縁所生であれば、自己は掴まれないのですから、自己に執著することも起らないわけです。私共が自己に執著するのは、自分という「変らないもの」があると思うからです。この変らないものと考えられているものが自我です。心中に自我を認めるから、自己に対する執著がおこりますし、外部に同様に固定的なものを認めるから「我がもの」を立て、それらを執著することになります。

しかしこの執著から「苦」がおこります。積尊は「苦からの解脱」を求めて出家されたのです。人間には生老病死の苦があります。しかしこれらはすべて自己に対する執著から起っているのです。他に対する慢心、他人の成功にたいする嫉妬、異性にたいする愛欲など、すべて苦の原因でないものはありません。

これらの苦は、縁起を正しく理解し、行動することによって、解消して、涅槃の樂に転化することができるのです。そのためには、無常なる存在を無常であると、正しく知っ

て、それに執著しないことが大切です。そこに固定的な狭い自己にたいする執著がなくなると、自己と社会とが一つになった「広い立場」に、生かされつつ生きることが可能になると思います。大乘佛教では、この「執著を持たないこと」を空に住すると表現しています。親族や財産、地位や名譽に執著する人には、そこに苦もあるが、同時にそこばくの楽しみもあるでしょう。しかしこれらの一切を放棄した人の住している安樂を知ることができません。真の安樂は、一切を放棄することによって「一切と成る」ことの中にあるという意味です。この安樂は、縁起の理解から生ずるのです。縁起の理解とは、自ら縁起に成ることであり、縁起の主體的在り方を実現することであると言うことができます。

この縁起の理解とは、般若の智慧によるわけであり、ものを区別して知る「識の認識」からは、縁起の理解は生じません。般若の智慧については、前回に少しばかり述べましたが、ここには別の観点から般若と縁起について考えてみたいと思います。

例えば両親と子供の関係について見ますと、子供にとっ

て父母は、自己の生れる縁になっています。父母の生命力や遺伝質等が、子供が母親の母胎に受胎する起源になっています。佛教では両親の遺伝質のほかに、前世からの業の力がこれに加わって、それらが一つに融合して、母胎に受胎すると説いています。そうでないと両親の遺伝質や生命力だけで、自己のはじまりが形成されることになりまして、両親とは異なる「自己の独自性」を主張することができな

いことよって知られます。一卵生双生児でも、二人の間に微妙な相違があります。それ故、私共は両親から生れながらも、両親とは一線を画した「自己」であるわけです。しかし同時に私共は、まぎれもなく両親から生れたのでして、両親と自己とは、強い「つながり」があります。しかし自己は自己であって、親そのものではないのですから、両親と自己との間には「だんぜつ」もあります。

しかしこの「つながり」と断絶」とは、自己と両親との間に見られるだけでなく、自己の成長を助けるあらゆる縁との間に認められることです。

しかしこの「つながり」すなわち「連続」と、それから「断絶」ということは、識の立場で示された理解です。つ



印の優秀品で郷土に奉仕する

## 関東化成工業株式会社

取締役社長 星野精助

各種 くみあい配合飼料 製造  
くみあい化成肥料

群馬県大間々町東武線赤城駅前  
電話(〇二七七)(三三一一)代

まり親と自己との間には、一面では「つながり」があることが認められるのですが、見方を変えた他の面では「断絶」が認められるという意味です。しかし連続と断絶ということとは、相互に矛盾する概念ですから、同時に同所に連続と断絶とがあるということは、識の理解の立場からは言えないことです。

龍樹は『中論』の中で、縁起を「八不」で説明しています。すなわち「連続でもなく断絶でもない。生ずるのでもなく滅するのでもない。一（同じ）でもなく多（異なる）でもない、来るのでもなく去るのでもない（という）」この八つの特徴をそなえている縁起を説きたまう佛陀に帰依します」と述べておりまして、縁起は八不を特質としていると説いています。つまりさきに、親と自己との間には、つながりと断絶が認められると言いましたが、しかし連続と断絶とが同時同所にあることは矛盾でして、このことは成立しません。故に私共が、識の理解に立って、親と自己との間に、つながりと断絶とがあると理解するのは誤りであるわけです。そうではなしに、親と自己との関係を、般若の智慧で理解して、その理解を言葉で表現して「連続でもない、断絶でもない」と言っているのです。形式論理の立場

では、「連続でもなく、断絶でもない」を言い換えれば「断絶にして、連続である」ということになりましたが、『中論』では、般若の理解が先にありまして、その理解は言葉では表現できないのですが、敢えてそれを言葉で示して「連続にもあらず、断絶にもあらず」と表現しているのです。般若の理解は言葉に依らないのです。生れたばかりの赤児でも、母親を見ればにっこり笑う。おもちゃを出せば、手をのばして取ろうとする。しかし生れたばかりの赤児は、言葉を知っているのではないのですから、言葉を知らなくとも理解はあるのです。

般若は無常な存在、変化しつつあるものを、あるがままに知る智慧でありますから、無我の智慧であり、無執著の智慧であります。これを空の智慧とも言っています。そして凡夫にも般若は不完全な形では活動しているのです。しかし煩惱を滅して、執著を離れるならば、般若の智慧は完全に活動するようになります。この般若の智慧は、識の理解では十分に示されないのでして、般若は無執著であり、主観と客観の合一した、そして苦を解消する安楽を本性とした智慧であるとしか言えないのです。この智慧が縁起を正しく知るわけです。

（東京大学名誉教授）